第八十一回珠實会・五條珠實リサイタル「オルフェ」（左から）ペルセフォヌ（中村京蔵）、オルフェ（五條珠實）、ウリディス（藤蔭静枝）　撮影：ビデオフォトサイトウ

［日本舞踊］

2022年の日本舞踊
―新しい日本舞踊家の波が見えた―

平野 英俊

三代目花柳昌太朗、三代目尾上菊之丞、志田真木

現在の日本舞踊界は、公益社団法人日本舞踊協会の理事でもある西川箕乃助、花柳基（もとい）、山村友五郎（ともごろう）の３名に加え、花柳寿楽（じゅらく）、藤間蘭黄（らんこう）の５人によるグループ「五耀會」を頂点としていると言って過言ではない。昨年は、この頂点を追いかける三人が目立っていたと思う。

一番に上げたいのは、三代目花柳昌太朗（しょうたろう）。「昌太朗の会」（４月２日、セルリアンタワー能楽堂）で演じた一中節「松風」と長唄「綾の鼓」、一門のおさらい会「第六十一回銀

昌太朗の会　長唄「綾の鼓」花柳昌太朗　写真提供：花柳昌太朗舞踊研究所

玲会」（10月2日、国立劇場小劇場）で演じた長唄「時雨西行」の西行法師（江口の君は花柳里佳泉）と清元「隅田川」の班女の前（舟長は花柳輔太朗）は共に、女流舞踊家独自の艶としなやかさが美事であった。男役の「綾の鼓」には気概が溢れ、「時雨西行」の西行では、その人となりを的確に演じて見せた。

尾上菊之丞の会　創作長唄「八俣の大蛇」
尾上菊之丞　撮影：加藤孝

次に挙げたいのは、三代目尾上菊之丞。歌舞伎の新作物の振付で八世藤間勘十郎と共に大活躍しているが、襲名後11年にして初のリサイタルとなった「尾上菊之丞の会」（9月3日、国立劇場大劇場）で、一中「猩々」（初代尾上菊之丞振付、尾上墨雪振付）では歌舞伎の尾上松也と猩々役（高風は尾上墨雪）を、義太夫「蝶の道行」（初代尾上菊之丞振付）では歌舞伎の尾上菊之助の小槙役で助国を演じ、さらに創作長唄「八俣の大蛇」（尾上菊之丞振付）では尾上松也の語りで大蛇役を演じ、スケールの大きさでは若手舞踊家では群を抜いていることを証明した。今後、どう日本舞踊界に貢献していくか、注目したい。

三番目に上げたいのは、琉球舞踊の重踊流二世宗家・志田真木。「真木の会」（9月16日、セルリアンタワー能楽堂）で、古典女踊り「伊野波節」、創作「古見之浦」、創作

「黒髪」を演じた。すでに古典女踊りでは定評があるが、今回の演目では、創作「黒髪」を古典女踊り風に仕上げ、その華やかな容姿から女の情をしぼり出す表現で、新しい息吹を感じさせた。本土と沖縄を結ぶ味わいには、琉球舞踊と日本舞踊を結ぶ線を感じた。

他に、昨年成果を上げた日本舞踊家と演目を並べてみると、古典舞踊では、泉翔蓉（いずみしょうよう）の清元「文屋」（第六回翔英会。3月12日、国立劇場小劇場）の洗練された素踊芸、花柳茂香（しげか）の舞踊芸術作品を伝承する西川祐子の創作「激（たぎ）つ」（祐子の会。花柳茂香構成・振付。11月22日、国立劇場小劇場）の、花柳基の共演がもたらした新たな精気が感動的であった。創作物では、五條珠實の創作「オルフェ」が秀作であった（第八十一回珠實会・五條珠實リサイタル。三代目五條珠實作・演出・振付。10月13日、国立劇場小劇場）。オルフェ（珠實）とウリディス（藤蔭静枝）とペルセフォヌ（中村京蔵）、三人の役柄への理解と演技が拮抗し、冥界と人間界のせめぎ合いが見事な空間を創造した。また、“日本舞踊の女方”にこだわる藤間清継の年間活動も精力的であった。主催の「泉樹会」（4月17日、国立劇場大劇場）で、自作で構成・振付・演出の「倭姫御巡幸～倭姫と貞奴～」を上演し、企画・プロデュースする「舞踊・女方の会」（7月24日・国立劇場小劇場）では、長唄「紀州道成寺」などを踊り、もう一つの主催公演の「華継会　東京公演」（11月1日、国立劇場小劇場）では、作詞・振付の創作「はなれ瞽女おりん」などを上演。創造と“日本舞踊女形（女方）ぶり”の探求の両輪の活動はすばらしかった。

真木の会　創作「黒髪」志田真木　撮影：新宮夕海　提供：琉球舞踊 重踊流

初代国立劇場さよなら公演

1966（昭和41）年開場の国立劇場建て替えを一年後に控えて、9月23日に国立劇場170回舞踊公演「舞踊名作集 I」（大劇場）が開催された。演目・出演者は、清元「四季三葉草」（翁：尾上墨雪、千歳：尾上紫、三番叟：尾上菊之丞）、義太夫「お七」（井上安寿子）、常磐津「粟餅」（杵八：西川扇与一、お臼：坂東朋奈、田舎侍：西川扇衛仁、鳥追：水木扇升、矢場女：藤間藤椛、福寿草売：花ノ本 寿、嫁菜摘：西川申晶、長唄「黒塚」（阿闍梨祐慶）：花柳寿楽、山伏大和坊：花柳源九郎、山伏讃岐坊：花柳寿々彦、強力太郎吾：花柳寿太一郎、老女岩手実は安達原の鬼女：花柳基）。

年齢的に中堅クラスの日本舞踊家を結集し、適材適所に配役を得て安定した番組であった。しかし、“舞踊名作集”と銘打ったものの、序幕の「四季三葉草」を除けば、実態は“歌舞伎所作事集”とした方が相応しい。「黒塚」の花柳基は歌舞伎俳優に拮抗する演技力を持つが、他は及ばない。歌舞伎舞踊と日本舞踊の本質の違いを理解させる企画は国立劇場の課題である。

もう一つの「さよなら公演」は、国立劇場171回舞踊公演の「舞の会―京阪の座敷舞―」（11月26日、小劇場）。演目・出演は、12時開演の部が、地唄 「閨の扇」（吉村ゆかり）、地唄「早舟」（山村若）、地唄「都十二月」（楳茂都扇性）、地唄「八島」（井上豆花）、上方唄「文月」（楳茂都梅咲弥）、地唄「きぎす」（吉村輝章、吉村輝之）。午後3時30分開演の部が地唄「茶音頭」（吉村奈尾）、地唄「邯鄲」（井上安寿子）、地唄「浪花十二月」（山村友五郎）、上方唄「霧の雨」（楳茂都梅衣華）、地唄「正月」（山村光）、地唄「珠取海女」井上八千代。吉村流からは吉村奈尾という新鮮な魅力、楳茂都流からは家元で歌舞伎役者の片岡愛之助こと扇性、梅咲弥、梅衣華の流儀伝承の確かさ、山村流からは友五郎の飄々とした大坂の街の風景を演じる表現、光の、節々と男と女になぞらえた正月のめでたさの表現力、井上流からは豆花の芸妓ぶりに、完璧ともいえる八千代の舞の奥深さと、多様な味が楽しめた。

この二公演の他に、国立劇場は開場55周年記念として「素踊りの世界」（3月5日、小劇場）を企画。歌舞伎の物真似ぶりの芸の構造を解説し、その素踊り化を披瀝していた。「素踊りの世界」と言う割には日本舞踊の独自性を探究しているとは言えず、寂しい。「花形・名作舞踊鑑賞会」（7月23日、小劇場）に至っては、全てが歌舞伎所作事。制作者が日本舞踊を歌舞伎と同一視しているかのような企画は残念である。日本舞踊のアイデンティティをもっと示したい。

公益社団法人日本舞踊協会の公演

前年度同様に「第64回日本舞踊公演」（2月19-20日、国立劇場大劇場）はコロナ禍で中止され、その代替公演として「日本舞踊～その多彩な表現」（10月21日、観世能楽堂）と「とどけ明日へ ～継承の轍～日本舞踊公演」（10月12日、国立劇場小劇場）が開催。新作舞踊公演としては、「第5回日本舞踊 未来座 =才(SAI)=」として「銀河鉄道999 一人の少年の才智の物語」（6月3-5日、国立劇場小劇場）が開催された。

観世能楽堂での公演では、新橋芸妓連中も出演し、“花街小唄振り”や“舞踊の所作”について解説やトークをまじえてやさしく分析、鑑賞では「与一の段～創作狂言掛かり」（尾上墨雪振付、半田淳子作曲、藤舎呂船作調）を花柳源九郎、西川扇重郎（せんじゅうろう）、花柳秀衛（しゅうえ）で、長唄「藤娘」は尾上紫が踊った。国立劇場小劇場では、企画作品「オデット Ultimate Love ～白鳥の湖より～」（花柳時寿京（ときじゅきょう）振付）や、珍しい長唄「翫雀傾城（かんじゃくけいせい）」、長唄「二つ巴（ともえ）」（花柳輔太朗振付。女性舞踊群舞）らを上演。いずれも明日へ期待を抱かせる演目が並んだのは嬉しい。

新作公演では、著名な松本零士原作のコミックを舞台化。日本舞踊の持つ現代性を訴えたと思われるが、月刊『日本舞踊』第74巻8号で、「現在の舞踊家が考えている<日本舞踊>像が、さらに分からなくなって、いっそもっと解体してしまった方がいいかも知れないとも思わされた」と書いた龍居竹之介氏に、私も同感である。恐らく、現在の日本舞踊家が持っている技術とは逆方向の表現を選択してしまったのではないだろうか。言葉と一体となる身体表現を、放棄していると見えてくるのである。

高齢舞踊家の活躍

「尾上菊音 百（もも）寿を祝う会」（7月21日、紀尾井小ホール）が開催され、菊音は墨雪と、東明「此の君」（尾上墨雪振付）を踊った。二人の全くの素の姿には、なんとも言えぬ存在感があり、竹の姿になぞらえるような、すくすくと真っすぐに伸びる舞踊人生を思わせた。

「至藝をつなぐ 西川扇藏（せんぞう） 文化功労者顕彰記念 素の会」（4月18日、国立劇場小劇場）で、扇藏は長唄「松の緑」を踊った。扇の振も律儀に、長年の舞踊への、踊への情熱を示した。洋の世界では考えられないことだ。

流儀の記念公演が相変わらず盛ん

「初世藤間紫十三回忌追善・三代目藤間紫襲名披露 紫派藤間流舞踊会」（1月30日、国立劇場大劇場）、「二代目猿若清方 傘寿記念 第七十四回猿若会 猿若」（4月23日、国立劇場大劇場）、「発足七十周年記念 第五十八回正派若柳流定期公演」

（8月20日、国立劇場大劇場）、「坂東会創立百周年 記念舞踊会」（9月17-18日、国立劇場大劇場）、「若柳亮太改め 若柳吉亮蔵（きちりょうぞう） 名披露目公演 若柳会」(11月20日、国立劇場小劇場）、「七世中村芝翫 十年祭 雀成会」（11月27日、国立劇場大劇場）などが開催された。中では、初世藤間紫の孫である藤間爽子が、舞踊家として三代目紫を襲名するにあたり披露した「京鹿子娘道成寺」と清元「道行初音旅」の静御前（忠信は兄の藤間貴彦改め翔（かける））は女優舞踊家のスタア誕生であり、彼女の今後に大いに期待したい。

グループ活動に新しい芽

藤間流（勘右衛門派）の藤間之宏（ゆきひろ）、裕太郎（ひろたろう）、豊彦、直三（なおぞう）の「黎明の会」（1月29日、日本橋公会堂）と、その直三と花柳貴伊那（きいな）が邦楽家たちと組織する「第四回蒼天公演」（8月24日、月島社会教育会館）は、新しい芽である。前者は素踊の探究を、後者は伝統芸能の幅広い層へのアピールを期待したい。共に名を連ねる藤間直三の存在は楽しみである。

その他、ベテランの花柳園喜輔（そのきすけ）の「日本舞踊 拓のつどい」（3月6日、国立劇場小劇場）、「第六回　花柳珠絃（たまいと）・泉裕紀（ゆうき）りさいたる たまゆうの會」（11月8日、国立劇場小劇場）、西川瑞扇（ずいせん）「朱鷺之會」（11月13日、セルリアンタワー能楽堂）は、さすがレベルの高い技術・創造力で、すばらしい作品を提供した。こうした人の活躍が今日の日本舞踊界を支えているといっていい。

話題

令和3年度の文化功労者に西川扇藏が選ばれたが、令和3年度の文化庁芸術選奨と新人賞に、日本舞踊関係の該当者はなかった。これは日本バレエ界の成長の証しであるが、日本舞踊（琉球舞踊、地域伝統舞踊）を含めた、日本の身体表現の本質への探究心がまだまだ充分ではないという証しともいえる。令和4年度文化庁芸術祭では、山村流双葉会が優秀賞を受賞した。来年度から芸術祭賞の贈賞は廃止されると聞く。一つの役割の終焉である。

ひらの・ひでとし

舞踊評論家。1944年、仙台市出身。早稲田大学第一文学部演劇専修卒業。大学では歌舞伎を専攻。出版社に勤務し『沖縄の芸能』、季刊「民俗芸能」、月刊「邦楽と舞踊」などの編集を担当後、身体表現の研究を求めて評論家となり、文化庁、日本芸術文化振興会などで専門委員などを務める。2016年には『評論 日本身体表現史――古代・中世・近世』（日本舞踊社）を上梓。